

天草方言で読む【源氏物語】

鶴田 功〈訳文〉

平安中期（11世紀） 紫式部の長編小説



源氏物語 〈原文〉

いづれの御時にか、^{にようご}女御、^{こうい}更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬがすぐれてときめき給ふ有けり。

はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましき物におとしめそねみ給ふ。

同じ程、それよりげらふの^{こうい}更衣たちはまして安からず。

朝夕の宮仕へにつけても人の心をのみ動かし、うらみを負ふ積もりにやありけむ、いとあづしくなりゆき物心ぼそげに里がちなるを、いよいよあかずあはれなる物に思ほして、人の^{そしり}譏をもえ^{はばか}憚らせ給はず、世のためしにも成りぬべき御もてなしなり。

^{かんだちめ}上達部・^{うへびと}上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。^{もろこし}唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も、引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひ給ふ。父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の^{よし}由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方がたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をももてなし給ひけれど、とりたててはかばかしき^{うしろみ}後見しなければ、事ある時は、なほ扱ひ所なく心細げなり。

先の世にも^{おんちぎ}御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。^{おのこみこ}いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる稚児の^{おかたち}御容貌なり。一の皇子は右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき^{きこ}聞ゆれど、この御にほひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、^{わたくしもの}私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。

初めよりおしなべての上宮仕へし給ふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、^{じょうず}上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしづしには、先づ^{もろ}参う上らせ給ひ、ある時には大殿籠もり過ぐして、やがて侍らはせ給ひなど、あながちに御前去らずもてなさせ給ひしほどに、おのづ

から軽き方にも見えしを、この御子生まれ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子の居給ふべきなめり」と、一の皇子の女御は思し疑へり。

人より先に参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほわづらはしう、心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。かしこき御蔭をば頼み聞えながら、落としめ疵^{きず}を求め給ふ人は多く、わが身はか弱く、ものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり。あまたの御方がたを過ぎさせ給ひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くし給ふも、げにことわりと見えたり。参う上り給ふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿^{わたどの}のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなき事もあり。またある時には、え避らぬ馬道^{めどう}の戸を鎖^さしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせ給ふ時も多かり。事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧^{ごらん}じて、後涼殿^{こうりょうでん}にもとより侍ひ給ふ更衣^{そうし}の曹司^{そうし}を他に移させたまひて、上局^{うえつぼね}に賜はず。その恨み、ましてやらむ方なし。

〈意識〉

いつ頃ン天皇の御世じゃったか、帝^{みかど}にお仕えしとんなさる大勢^{たいせい}の女御^{にようご}や更衣^{こうい}がいる中に、そがん高貴な身分でもなか一人の更衣^{こうい}（桐壺^{みかど}）が、帝^{みかど}の寵愛^{ちようあい}バー身に受けておんなした

入内^{じゅだい}当初から、我こそは正妻になろうともて、思い上がとらず女御方は、そがん更衣^{こうい}が目障りでしよんなからすもんだけん、妬みや嫉妬がひどかった。

同格の者やそれより身分の低^{こうい}っか更衣^{こうい}たちは、まして気の休まらん。

朝夕^{そばつか}の側仕えにしたっちゃ、他の女房たちから心バ搔き乱さるる一方で、そがんした恨みが積もり積もったせいじゃろ、病が嵩じるばかりで、いんま死んとじゃなかかちゅう不安から、心も弱り、里帰りばかりなさるごてなった。

帝^{みかど}はますますみぞげに思うて、周囲^{そし}が誹りよっともお構いなしで、世の語り草にもなりかねんとに、帝^{みかど}は熱烈な遇^{もてな}しようじゃんす。

上達部^{じやうたふ}とか殿上人^{でんじやうじん}なんかも、思わず目バそむきゅうごてなるごつ、何ともまあ、目映かごたるご寵愛^{ちようあい}ぶりじゃんなした。

「唐土でも、こぎゃんしたことがもとで、世が乱れ、災厄^{さいやく}バ招いた」と、世間でも、道ならんことだけに扱いに窮^{きゆう}して悩みの種になり、楊貴妃の名まで具体的に持ち出されかねん事態に進む中、更衣^{こうい}（桐壺^{みかど}）は、いたたまれん思いバすることが多うなった。

ばって、あまりにも帝^{みかど}が深か愛情^{あいきん}バ掛けて下さるもんだけん、それば頼みに、宮仕えバ続けるこてなさった。

（桐壺の）父親の大納言^{だいなごん}ナもう亡くなっておいでばって、母は家柄^{いへ}の古か、なかなか教養^{きやう}豊かなお方^{かた}じゃんなさる。

二親^{ふたご}そろうとって評判^{へいばん}のゆうして、勢^{いき}い盛な女御^{にようご}方にもさほど見劣りせんし、宮中の諸行事^{しよごうじ}まで賄^{まわ}うておいでばって、これちゅうて力のある後ろ盾^{かしろたもと}もなかつたけん、いざち

ゆう時にゃ、やっぱり頼みのあてがなかけん、心細か様子じゃんなした。

さきの世でも、帝みかどとのご縁が深かからしたっじゃろうか、身に余るご寵愛バ受くるばかりか、世にも稀な気品のそなわった玉のごたる御子がお生まれになった。

里でお生まれの御子バ、帝みかどはまだかまだかと心せかれておられ、宮中さん急せえで連れて参れちゆて、呼び寄せてご覧になったところが、またとなかお顔立ちの整うた赤子じゃんす。

第一皇子は、右大臣家の娘の女御にようご（弘徽殿こきでん）がお産みの御子じゃんす。後ろ盾の力も強うして、間違いなし次期皇太子だけん、世間でにゃ大切に扱い申し上げちゃおる。

ばって、この宮の輝くごたる美しさにゃ及ぶはずもなかけん、第一皇子にゃそれ相應たつとに尊んでにゃおらすばって、こん若君だけは秘蔵子として慈しみ大切いつくにしなさる、そがん様子がありありと見てとらるる。

もとより、この更衣は、近侍こういがするごたる側勤めのごたる雑事バ、さっさんばんごたる身分じゃなかった。世間からもたいそう尊ばれ、女御にようご並みに貴人の風格バそなえておんなさった。

むやみと帝みかどが側におらせてお放しにならんもんだだけん、立派な管絃かんげんの会の折りとか、どがん催しであれ格式のある行事の折りにゃ、真っ先にこの方がお上りになるごてはかれ、時にゃ共寝のまま起きそびれて、そんまま側仕えバさせなはったり、強引にお手元から離さでにゃもてなしておいでになるうちに、おのずと品の下るお方と見られもした。

この御子がお生れになってからは、正妻じゃらすかのごて格別の計らいバなされたため、皇太子にも、ことによれば、こん御子がお立ちになるかもしれんちゆて、第一皇子の母にようごの女御は気バもんどらす。

真っ先じゅたいに入内なさって、第一夫人として尊んでおんなさるお心持ちに変わりはなかばって、皇子ばっかりじゃのうして、皇女までも授かっておいでだけん、このお方のお諫めばかりゃ、いくら更衣こういへの愛情が深かちゅうたっちゃ、やはり聞き流しやでけんし、わずらわしゅうして心苦しゅう思うて申し上げなさった。

もっちゃなかご加護バ頂きながらも、さげすんだり、あら捜しバなさる方が多うして、自身な病身で先々不安な身そらじゃらすて、ご寵愛ゆえにかえって運命に対して深か気労バしなさる。

桐壺のお部屋には大勢のお方々の局つぼねバ通り越して、休む暇もなかお通いに、人の心バすり減らしになっとも、まこて、尤もだて思えた。

更衣が参上なさる場合っちゃ、あまりたび重なる折りにゃ、廊下の掛け橋や渡り廊下のそっこに汚らわしか仕掛けバしてある。送り迎えに立つ女官にゃ耐えがたかそうなもんで、何もならん悪戯バしてある。

またある時は、御前へ上がる際、みんなでしめし合せて、あちこちに避けて通られんごて馬道ン戸バ締めて立ち往生させてにゃ、はずかしめることも多かった。

ことに触れ、数しらす苦しかことばかりが募る一方だけん、ひどう思い悩んどらすとば、帝みかどは、ますますみぞげに思われて、後涼殿にもともとお仕えなさっている更衣の部

屋バよそさんお移しになり、桐壺の上局として下賜なされた。こっじゃ追われた更衣の恨みはなんとも晴らしようがなかる。

御子が三才におなりの年、儀式用の御袴着は、第一皇子がお召しになったものにも劣らんじゃった。内蔵寮や納殿の財貨バ尽くして、盛大に執り行いになった。

そうした帝みかどのなされようにつけても、世間では逆順のそしりばかりが横行したばって、こん御子のご成育なさっていくお顔立ちや趣味のよさは、たぐい稀れまで賞賛せえでやおられんほどになんなさつとば、誰も憎むこたできでにゃ、ものの道理バ見抜くことのできるお方は、こぎゃん方も世に生れてこらすとばいねと、御子の相に危惧さえ抱くくりゃに目バ見張っておんなされた。

その年の夏、若宮の母である御息所は、病で心細か気持ちになり、里に下がろうとなさるばって、帝みかどはいっこうに暇バ与えようとはなさらん。

何年来、ずっとご不調続きのご様子じゃんなされたため、見慣れておいでの帝みかどは、「もうしばらく様子バみとけ」とだけおっしゃるばって、ご病態は日に日に悪化され、わずか五六日のうちにひどう衰弱してしまわれたけん、更衣の母君が泣く泣く帝みかどに奏上して、よよして御前から退出させてお上げになった。



そうした折りにも、東宮権バ失うという、あつてはならん不面目なことが起きんごて用心して、御子バ帝みかどのもとにお留め申し上げて、涙バのんでお出になんす。

決まりがあることだけん、そう留め置くこともおできにならでん、最期まで見届けてお上げになれんもどかしさバ、言葉にでけんほどつらくお悔やみになる。

とても艶やかつやでみぞかお方が、ひどう面は瘦せて、とても辛かことばって、これが定めばいと、しみじみ感じながら、言葉に出して申し上げることもでけでにゃ、生死のさかいで消え入りそうにしとんなさるご様子バ、帝みかどはご覧になるにつけ、後先の考えもわきまえにならでにゃ、どぎゃん誓いでん涙ながらにお立てになつとばって、更衣はお返事バ申し上ぐることもできなっせんで、目元なども大層もろだるそうみかどで、ますますなよなよなつて、意識朦朧として衰えてしまわれたけん、帝はどぎゃんみかどなつてしまわすとじゃろかと、御心バお惑わせになった。

輦車てぐるまの宣旨などご発令になつても、また部屋にお戻りになつて、いっこうに退出バお許しならん。「宿命で決まった道じゃつたっちゃ、遅れて先立っちゃならんてお誓いなされたのに。つらくても、まさか、う捨てて行っておしまいじゃなかるもんね」ちゅて仰つとバ女も、どもこも不憫ふびんに思うて、

かぎりとして 別るる道の悲しきに いかまほしきは命なりけり

「生・不生は定めであり 別れに際し こうも悲しかとに 側で生き続けたかちゅて願うとは我が命じゃね。 こうも辛か別れバするくらいなら、思い存分お別れしておくとじゃった」と。

息も絶え絶えで、申し上げておきたいことがありそうな様子ながら、どうにも苦しげ

で、しんどそうなので、こんまま、どうなることであれ、結果バ見届きゅうてお考えになった。

「ご祈祷などバ今日始めなっせんバ、例の立派な験者たちが承っておりますけん、今夜にも」と、側女がせき立て申し上ぐるけん、納めようもなうご心痛じゃんなすどばって、退出をお許しになった。

どうかすると御胸がふさがって、いっこうに眠られでん、夜バ明かしかねておんなさる。

使者が行って戻る時間でもなかとに、それでもご心労バとめどなく口になさっておられたが、「夜中少しまわった頃、お亡くなりになられた」と、里人が泣き騒ぐけん、使者もどうにもならでん宮中に戻ってきた。

お聞きあそばす帝みかどのご乱心の様、何事もお分かりにならず、部屋にひき籠っておいでになる。

若君のことは、こぎゃん場合でん、ご覧になっておろごたると強くお望みばって、喪中もちゅうに宮中におとどめ申し上げる前例はなかことだけん、ご退出の運びとなる。

何がその身に起ころうとしとつとも若君はお分かりでなく、側仕えの人々が泣きまどう姿や、帝みかどが涙の干る間もなかごて泣いておられるご様子バ、何だろうと見守っておんなさった。

栄転などよか理由であったっちゃ、親子が別れ別れになつとは悲しくなかはずはなかとに、ましてこん場合、東宮候補から外れかねん。里帰りは哀れで言葉にも尽くせん。

限度のあることだけん、作法どおりに葬ってお上げになつとばって、母親は同じ煙になって一緒にあの世へ行ってしまうたかて泣きこがれて、葬送の女房の車に無理にお乗りになって、愛宕あたごという、おごそかに葬儀が執り行われている埋葬の地へお着きになつたばって、その時のお心持ちはいかばかりじゃらしたろうかい。

「むなしくなった御亡骸なきがらを見るにつけ、なおも生きていらっしゃるのではと思ってしまうのが、何の甲斐もなかことだけん、灰におなりになるのバ見申し上げて、もう亡き人じゃもねときっぱり思い切ろうと思うて」と、心とは裏腹に気丈に挨拶なさつたばって、車に乗る際、転げ落ちてしまいそうになったのバ見た人々は、そぎゃんことだと思っていたと、慰めようがなく困ってしもた。

宮中からお使いがあり、三位のくらいバ追贈あそばすと、勅使が来て、三位追贈の宣命バ読み上ぐつとが悲しかことであった。

生前、后はおろか女御とさえ呼ばせでにゃ終ったことが口惜しくてならんてお考えだけん、死後にはせめて女御の位にと一つ位をお与えになった。

ばって、この追贈一つバとってん、更衣バお憎くみになられる女御たちは多か。

ものの情理バおわきまえ知る女御・更衣は、姿や顔立ちのうつくしかつたこと、気立てが素直で欠点がのうして憎めんじゃつたことなどバ、今になって懐かしく思い出になる。

外聞のなか見苦しか帝みかどのご寵愛ゆえ、心にもなく嫉んでおられたのであろうばって、人柄がよく情愛こまやかな更衣の御心みかどバ、帝みかどつきの女房たちも恋い偲び合うたとじゃつ

た。

「亡くなって始めて恋しゅう思わるる」という歌は、こういう時の気持ちじゃろうと思わるる。

いつのまにか日が経ち、七日七日の法事などにも懇ろに弔問の使いバお出しになる。

時が経つにつれ、どがんしようもなく悲しゅうお思いになられ、女御たちとの夜伽もなさらんで、ただ涙に朝夕くれておんなさるもんだけん、ご夫人方ばかりか拝顔する女房たちまでが悲しみに沈む秋となる。

「死んだ後まで、心晴れ晴れさせてもおかっさんご寵愛ぶりじゃんなす」

弘徽殿などは死後もなお容赦せんおっしゃりようである。帝は第一皇子バ御覧申し上げるにつけても、若宮バ想う恋しさばかりが御心にあらずもんだけん、そんなたびに昵懇の女房や乳母などバ里に遣わして、どがんどがんしとるかお訊ねになる。

野分ンごたる風が吹き、ひょくっと肌寒さバ感じる夕暮、いつもよりかも更衣のことバ思い出されることが多うなって、帝は鞆負命婦という女房バ使者にお遣わしになる。

夕月が夜空に美しゅう昇った頃に使者バお立てになり、そのまま月バぼんやり眺めておいでになる。

こがんした月の美しか夜には、管絃の遊びなどバ催さしたもんばって、更衣は格別上手に琴バ弾き、何心なく口ずさんだ愛の歌までもが、人とは異なる雰囲気と姿バ宿した月の幻影にふと重なったごてお思いになつとばって、それにつけても、闇の逢瀬は夢の逢瀬と変わらずはかなかもんちゅう歌があるばって、その歌にもまして、亡き人の幻との逢瀬ははかなかもものじゃった。

命婦は更衣の里に行き着き、門より牛車バ引き入れるや、あたりの気配には哀感がただよう。更衣の母はやもめの身ながら、娘一人の養育のために、とかく邸内は数寄バ凝らし、世間に恥ずかしくなかつた暮らしぶりバなさっておられたばって、娘の死後悲嘆にくれ床に臥せって過ごされておらすうちに、草も高うなり、今日の野分でますます荒れた態となって、ただ月の光だけが、八重葎にもさえぎられずに射し込んでる。

建物の正面口で轅^{ながえ}バ下ろして、挨拶するこてなるばって、勅使の命婦も出迎える母君も直には何も仰やれない。

「これまで生き長らえてまいりましたことが何とも心苦しかとに、こがん帝^{みかど}のお使いが草深いあばら家に、露に濡れながらお越しいただくにつけてましても、居たたまれん思いでして」と、いかにも堪えがたそうにお泣きになる。

 トップページへ戻る